

メディアに関心のある読者諸氏のみならず、教育をそして教育学を語ることへの違和感を内部に未だ抱え込んでいる方々にお薦めしたい魅力的な一書である。

(東京大学出版会刊 2004年6月発行 A5判 322頁 本体価格5,000円)

吉田 文・広田 照幸 編

『職業と選抜の歴史社会学

——国鉄と社会諸階層——』

伊藤 彰浩 (名古屋大学)

本書は近代日本の「ノン・エリートの世界」に焦点をおいて、その〈学び〉と社会的選抜の関係を明らかにしようと試みた労作である。これまで社会的選抜の問題は教育体系の上層部をなす中等教育・高等教育との関わりにはほぼ限定されて考察されてきた。しかし本書は、より幅広いレベルの学校教育機会へと、さらには学校外の多様な学習の機会や資格・試験・技能の世界へと踏み込み、それらと選抜との関係を追究する。戦前期において中・高等教育進学者はごく一握りのエリートに過ぎず、大多数は本書が対象とする「ノン・エリート」だったことはいままでもない。本書はそうした「普通の人々」と教育・職業・選抜の関わりを問う、本格的な「ロー・アングル」の視点をもった研究としての意義をもつ。

さらに本書のもうひとつの意義は、国鉄という興味深くかつ最適の対象をとりあげたことである。本書で指摘されているように国鉄は、多様な職種をもった巨大組織であり、内部に大きな身分差と採用・昇進への大きな学歴差をもち、しかも他方で学歴以外の多様な昇進チャンネルをも合わせもったまさしく「試験、資格、技能と学歴とのせめぎ合いの場所」(p.22)であった。この書物は、そうした格好の研究材料を得ての「ノン・エリートの世界」の解明をめざす試みとあってよい。

本書は序章と第1部、第2部から構成される。それぞれの内容を簡潔に紹介しておこう。

序章(広田)では前述のような本書全体を貫く問題関心が述べられ、さらに先行研究の分析枠組みを修正し、あらたなモデルが提示される。とともに本書の主たる題材となる国鉄についてその組

織特性が整理される。

続く第1部は4つの章で構成されている。まず1章(吉田)では、昭和初年の小学校卒業者の進路と彼らの労働市場における位置が、尋常小学校卒と高等小学校卒を対比させつつ、全国レベルの統計を駆使して描かれ、続く各章の前提ともなるデータが提示される。2章(高瀬)では1930年代に農山村を離村した青少年の特性と彼らの移動の特徴が明らかにされ、都市流入者のきょうだい順位、移動における性差、移動者の職業分化などが分析される。3章(新谷)は電気系技術職の養成機関としての甲種工業学校と工業系各種学校に着目し、とくに後者の専門学校の人材供給における役割の大きさを明確にする。そして4章(鈴木)では近代家族の登場が諸階層内での多様性をもって展開したことが明らかにされ、教育的配慮の対象としてではなく、「邪魔者」としての子供観をもつ社会層の存在が指摘される。

以上の第1部が各執筆者の関心に基づく多様なトピックを扱ったのに対し、第2部はいずれも国鉄を対象とした5つの章から成っている。5章(河野)は国鉄の諸規定を材料として、採用・昇進と学歴の関係を検討し、そこにおける学歴の効用を明らかにする。そこでは一般社会的な学歴序列が必ずしも通用せず、国鉄内の教育機関卒業者が優遇されるといった独特の序列が存在したことも指摘される。6章・7章(三上)は国鉄内の教育機関である鉄道教習所における教育とその受け手たちの実態に迫り、その機関が度重なる改組を経つつも苦学青年たちの人気を獲得し、「貧者の学校体系」としての評価を確立していった過程が明らかにされる。8章(広田)は下級職員の昇進機会の実態を2つの調査データをもとに検証し、概して学歴が昇進に大きな意味をもったことを明らかにしつつ、昇進における高等小学校以上の学歴の有用性などを検証する。最後の9章(広田)は国鉄が身分的上昇を伴った盛んな内部登用をおこない、低学歴の青少年にとって魅力的な職場であった反面、そこでは学歴による微細な差別化や現場管理者による専制的権限の保持といった影の側面も存在したことを指摘する。加えて本書全体の課題として、さらなる綿密な検証の必要性とともに、「個人的上昇」の欲求・野心を前提としがちな研究者の視座の見直し・相対化を挙げる。

「ノン・エリートの世界」は著しく多様性に富

み、しかもそれに関わる利用可能な史料は必ずしも十分に存在しない。しかし本書は、史料収集の困難さに挑戦しつつ、対象のもつ多様性を丹念に描き出すことで、部分的ながらも今後の研究にとって重要な足がかりを築いている。「パッチワークのパッチを作る作業」(p.14)から「全体像」を描き出す研究への今後の展開が大いに待たれる。(世織書房刊 2004年10月発行 A5判 352頁 本体価格3,400円)

秋枝 肅子 著

『森有礼とホーレス・マンの比較研究試論

— 日米近代女子教育成立史研究の過程から —』

水野 真知子 (野間教育研究所)

本書は、初代文部大臣森有礼とアメリカ公教育の父と称せられたホーレス・マンの両者について、女子教育史の視点から新たな光をあて、その比較研究を試みたものである。

歴史研究の中で女性史を課題とすることは、1970年代においてなお自明の理ではなく、その研究は緒についたばかりの段階にあった。本書の著者は西洋史を専攻していたが、1950年代において既に、日米の女子教育史を課題とした論文を発表しており、その主題は書名に端的に示されている。1949年から93年までの14編に及ぶ論文は、「日米両国における近代女子教育の成立過程に関する研究」(序論)と「森有礼とホーレス・マンの比較研究」(本論)、並びに「森有礼と植木枝盛」(補遺)の各々に、ほぼ初出のまま、発表年代順に構成されている。

著者の立脚点の一つは、森はその生没年からマンの声咳に接することはあり得なかったにもかかわらず、代理公使としての滞米を機に、アメリカの教育事情を研究する中でマンに傾倒、熟知し、その教育観、女性観及び実践において、並々ならぬ影響を受けていたに相違ないとする仮説である。本書を貫くこの仮説は、著者が日米両国の女子教育史研究を、併行して進めてきたことから導き出されていることに注目したい。それは、著者が戦前、例外的に女子に門戸を開いていた東北帝国大学、昭和20年の女子入学者三人の内の一であり、西洋史学科初の女子卒業生となったこととも

無関係ではない。

巻頭論文「アメリカにおける女子教育成立の基盤について」は、その卒業論文が土台となっており、同大学の西洋史・日本史・東洋史料合同の研究誌『歴史』第一輯に掲載されたものである。既に絶版となっていたトーマス・ウッドィの、当時における最も詳細なアメリカ女子教育史書入手の困難を乗り越え、占領期の東京日比谷に設立されたアメリカ文化センター附属図書室に日参することから、研究の扉は大きく開かれていく。研究者以外の人にも広く読んでもらうために、英文や註を入れられないという編集方針に基づいて活字化されており、同論文が当時、いかに新しい研究として迎え入れられたかが伝わってくる。

著者は大学院において、さらに日米の女子教育成立史の研究を深めるが、その過程でマンと出会い、森の思想形成、とりわけ女子教育観に与った特定の人物としてマンを措定するのである。だが、当時、アメリカでもマンの女子教育観を主題とした研究は皆無に等しく、一方の森についても、女子教育の観点からのものは青山なをの論考以外にはなく、ましてマンとの関係について言及したものは皆無という研究状況であった。因に、アメリカにおいて、アンティオク・カレッジにおける共学制実施の経緯と従来からのマンの定説に、再考の欽入れがなされたのは、1980年代に至ってからのことである。

著者は、マンの講演集や年次報告書・日記等を丹念に渉猟し、森については戦前・戦後の評価をふまえながら、両者の関係性を克明に検討している。しかも、その関心は女子教育に止まることなく、森の英文で書かれた宗教の自由に関する小論文に着目、重視し、まずは森とマンの宗教観及び教育観について、次いで庶民教育への期待と公費教育の思想・教師像及び教師養成・教育の政治的安全性・教育と経済のかかわりについてなど、より幅広く説き明かされている。

これらの論点から、読者の眼前には、建国間もないアメリカの目覚ましい発展期に生を受けながらも、貧しい農夫の子として苦学の青年時代を過ごしたマンと、幕末、薩摩藩士の子として生まれ、マンとは対照的に、恵まれた青年時代を送った森の姿が浮かび上がってくる。そして、両者の間には共通点や類似の思考もさることながら、国情や社会構造の違いなどからも、微妙な相違あるいは大